地域で共に学び共に生きる教育を目指して

いわき支援学校くぼた校
教諭　　児玉光彦

１　実践の内容及び方法

（１）はじめに

本校は、平成２７年４月、勿来高等学校の空き教室を活用し、いわき支援学校の分校として開校した。くぼた校といわき市の中心地にある本校とは、３０kmほど離れており、いわき市内の特別支援教育の充実を図ること、共生社会の形成に向けた福島県特別支援教育の基本理念「地域で共に学び共に生きる教育」を推進することを目的として設置された。高等学校内に特別支援学校の分校が設置されることは県内で初めてのことであり、開校当初は、それぞれの校種が違う学校がうまく共存できるか、生徒同士のトラブルが起きないか、特別教室の使用はできるのか、など様々な不安がある中で、両校の教師が連絡を取り合いながら、教育課程の編成、時間割の工夫、そして特色ある学校づくりに取り組んできた。

（２）交流及び共同学習の推進の工夫

・同じ校舎で生活することのメリットを生かして、学校生活の中で接点や関わりを大切にすること
・互いの学校の教育課程の実現を大切にすること
・両校の生徒、教師が無理せずにできるところから進めること

２　実践の成果

（１）学校生活の中で接点や関わりを大切にすること

①　学校行事

・対面式は学校同士が同じ校舎で学ぶためのスタートであり、静粛な雰囲気の中で行われ、くぼた校の生徒にとっても儀式的行事はきちんとしなければと自然と感じる活動になっている。
・総合消防防災訓練は勿来学校の行事や計画に合わせて合同で実施している。くぼた校生にとっては高校生の行動を見本とする実践的な学習の場となっている。

②　生徒会活動

・朝のあいさつ運動は、県内一斉で高等学校の生徒会が実施している活動である。くぼた校の生徒にとってあいさつの習慣は長所でもあり、勿来高校も力を入れている活動でもある。同じ昇降口を利用し、登下校の時刻も一緒で、共に学べる活動になっている。

③　職業科の連携

・くぼた校が作業で織ったさをり織りの反物の製品化を勿来高校の家庭クラブにお願いをした。勿来高校生がくぼた校の職業（作業）を知る機会になり、くぼた校にとっても、製品作りの流れや勿来高校とのつながりを意識できる取組となっている。また出来上がった製品は地域の商業施設で販売会を行っているが、その取組を知った地域の NPO 法人から両校にふさわしいロゴマークを制作したいと依頼があり、勿来高校、くぼた校の心が通い合うような願いを込めて「nacoro」と名付けて、製品に付けで販売している。家庭クラブとの連携から地域との連携にも発展し、両校で誇りをもって進めている活動になっている。

（２）互いの学校の教育課程の実現を大切にすること
両校をつなぐ「共生プログラム」の実践

両校の交流を深めることを主な目的として計画された学習として「共生プログラム」がある。勿来高校ではくぼた校開校前から併設を意識し、勿来高校生徒たちがくぼた校の生徒たちをスムーズに受け入れることを目的として授業を行っていた。開校後はくぼた校も一緒に企画、立案に参加して取り組んでいる。

令和５年度　共生プログラム

●日時
第１回：４月１３日（木）５校時　第２回：６月９日（金）５・６校時
第３回：１２月上旬～中旬３、４校時（くぼた校の作業実施日）

●対象
１年生全員４２名（１組：２１名　２組：２１名）

●内容について

	内　容	講　師	場　所
４月１３日（木） ５校時 （45分授業） 13:00～13:50	**「くぼた校について知ろう」** ・くぼた校の生徒が活躍する様子等を紹介することで、くぼた校を様のよいところに気付かせる。 ・くぼた校の先生から、学校生活についての説明を聞く。その際、授業紹介だけにとどめず、特別支援学校で行われている授業の意義や目的などについても話していただき、「作業活動＝楽しい」ではない、実際の部分についても説明していただく。	くぼた校教員２名	第二体育館 １学年担任
６月　９日（金） ５校時 ６校時 13:35～15:15	**「障がいの理解と関わり方」** ・障がいの擬似体験 ・障がいがあることはどのような感じなのか、このような感じがするならにういう風に考えればよいという気付きをもつ。 ・障がいがあることへの理解を深め、コミュニケーションの幅を広げる。	くぼた校 くぼた校教員２名	第二体育館 １学年担任副担任
１２月上旬～中旬 ３校時 （２組） ４校時 （１組）	**「くぼた校の生徒と一緒に活動しよう」** ・くぼた校の生徒や先生方と一緒に活動（ビルクリーニング・製作・工芸）をすることで、お互いの理解や交流を深める。また、くぼた校の生徒が「職業」にするために行っている作業学習を体験することで、「働く」ということ、「仕事をする」とはどういうことかを体感し、自分自身のありかを考えるきっかけとする。また、くぼた校の生徒の授業内容を体感することで、活動への理解を深める。 ＊活動のないクラスは教室でふりかえりやまとめを行う。	くぼた校教員８名	校内各所 くぼた校 １学年担任 副担任 活動 １学年担

令和５年度　共生プログラム

●日時
第１回：４月１３日（木）５校時　第２回：６月９日（金）５・６校時
第３回：１２月上旬～中旬３、４校時（くぼた校の作業実施日）

●対象
１年生全員４２名（１組：２１名　２組：２１名）

●内容について

	内　容	講　師	場　所
４月１３日（木） ５校時 （45分授業） 13:00～13:50	**「くぼた校について知ろう」** ・くぼた校の生徒が活躍する様子等を紹介することで、くぼた校を様のよいところに気付かせる。 ・くぼた校の先生から、学校生活についての説明を聞く。その際、授業紹介だけにとどめず、特別支援学校で行われている授業の意義や目的などについても話していただき、「作業活動＝楽しい」ではない、実際の部分についても説明していただく。	くぼた校教員２名	第二体育館 １学年担任
６月　９日（金） ５校時 ６校時 13:35～15:15	**「障がいの理解と関わり方」** ・障がいの擬似体験 ・障がいがあることはどのような感じなのか、このような感じがするならにういう風に考えればよいという気付きをもつ。 ・障がいがあることへの理解を深め、コミュニケーションの幅を広げる。	くぼた校 くぼた校教員２名	第二体育館 １学年担任副担任
１２月上旬～中旬 ３校時 （２組） ４校時 （１組）	**「くぼた校の生徒と一緒に活動しよう」** ・くぼた校の生徒や先生方と一緒に活動（ビルクリーニング・製作・工芸）をすることで、お互いの理解や交流を深める。また、くぼた校の生徒が「職業」にするために行っている作業学習を体験することで、「働く」ということ、「仕事をする」とはどういうことかを体感し、自分自身のありかを考えるきっかけとする。また、くぼた校の生徒の授業内容を体感することで、活動への理解を深める。 ＊活動のないクラスは教室でふりかえりやまとめを行う。	くぼた校教員８名	校内各所 くぼた校 １学年担任 副担任 活動 １学年担

両校の教育課程に位置付けて進めている。

共生プログラムは両校の生徒にとって大きなメリットがあり、重要な取組の一つとして、

実施に向けては、両校の教師が互いの学校における指導目的や生徒の実態について共有し合い、授業に臨んでいる。事前のくぼた校生徒の活動に対してのアンケートでは、期待と不安の両方の意見があったが、活動を通して勿来高校生徒の学習に対する取り組み方への気付きが見られる。勿来高校の生徒にとっては、くぼた校の学習について知ってもらうだけでなく、「共に学び共に生きる」についての理解につながる一歩となっている。その成果は勿来高校生の振り返りにアンケートからも読み取ることができる。共生プログラムは両校の生徒にとって大きなメリットがあり、重要な取組の一つとして、両校の教育課程に位置付けて進めている。

「共生プログラム」全体を通した振り返り～抜粋～

○「くぼた校の生徒と一緒に活動しよう」の振り返り。
この授業で印象に残ったことを書いてください。

・いつもの清掃時間と変わりないのに疲れました。思ったより大変なことを毎週くぼた校の生徒の人たちがしているからすごいと思った。
・くぼた校の人と協力してエコバッグを作ることができた。手先の器用さにおどろいた。同じものを一緒に作ることにやりがいを感じた。
・くぼた校の人の教え方が分かりやすい。とても疲れる作業だった。
・今から卒業後の働くための勉強をしていることにおどろいた。
・毛糸でたわしを作った。以外とむずかしかった。それをすいすいやっているくぼた生徒はすごいと思った。

○今日の作業を通して、これからの社会（＝学校、地域等）の中で生活していく上で大切にしなければいけないことは何だと感じますか。

・障がいがあるからといって、特別扱いをしないで、友達と同じように話をしようと思った。
・人の悪い所ばかりではなく、良い所を見る。その人の個性を大切にする。何事にもみんな協力することが大切だと思った。
・障がい者だからと差別せず、仲よくいろいろなことに取り組んでいければいいなと思った。将来的に役に立つことを学べたのでよかった。
・いろいろな人たちのことを分かった自分もその支えになれるように頑張っていきたい。

（３）両校の生徒、教員が無理せずにできるところから進めること

数年前から勿来高校体育祭の学級対抗リレー競技へくぼた校も参加している。コロナ過では、両校で実施してきた交流及び共同学習も自粛を余儀なくされ、勿来高校でくぼた校と一緒にできることはないかと、考えてのことだった。きっかけはくぼた校の体育の授業を見学していた勿来高校の体育科の教師の、「くぼた校生は走るのが速い。競わせたら良い結果になるかも。」その一言が発端である。実際に大会はくぼた校が第２位となり大いに盛り上がりを見せた。また、３年に一度実施する勿来高校文化祭も、令和５年度はくぼた校と合同で実施された。両校の生徒会が中心となり、両校生徒による校歌斉唱、ステージ発表、共同美術作品など内容は多岐にわたったが、同じ校舎で生活することのメリットを最大限に生かして、両校の生徒、教師が無理なく、授業、朝や放課後の時間を利用しながら一緒に進めることができた。

３　課題及び今後の取組の方向性

くぼた校と勿来高校の併設は、両校の生徒のとって新たな学びにつながっている。くぼた校の生徒は勿来高校の生徒から生活態度、規律、同世代のコミュニケーション等、特別支援学校内だけでは学べないことを登下校や休み時間、授業、行事など学校生活の自然の流れの中で学ぶことができている。勿来高校生徒の学びについては、共生プログラム後の感想の中で見ることができる。教師同士にとっては、様々な学習場面や生活場面で調整と再確認が必要となってくるが、そのこと自体

が新たな取組となり、教師同士の共通理解や接点の気づき、ひいては生徒同士の学びにつながっていく。

前にも述べたが、共生プログラムは開校当初の様々な不安がある中で、くぼた校の受け入れに向けた取り組みであった。取り組んでいくうちに共生プログラムで得られる視点や考え方は、高校生自身が自分たちの生活の中で生かせるものではないかとの気付きがある。障がいがある、ないという理解の仕方もあるが、自分たちの周りにも、学級の中にもいろいろな人がいて、どんな人ともより良い関わりをして、つながっていくためには違いに対する寛容さや伝え合う力が大切ではないかと、ねらいが広がっていった。そのテーマが共生という視点であり、両校のつながりのテーマとなっている。

今後も多くの接点やつながりを大切にし、両校にとって、充実した学びになるように、さらには地域で共に学び共に生きるための一歩となるように取り組んでいきたい。